〈論文〉

A認定こども園保護者調査を通した親の自己肯定感育成に関する研究
―子どもの自己肯定感を育むことを目的として―

寺　田　恭　子

1．研究の目的

1 ）研究の背景と目的

本研究は、人間の主体性基盤である自己肯定感に焦点をあてた研究である。本研究における主体性は、あらゆる生物が持ち備える周囲の環境に適応するための根拠関係である。現存する生物は、環境との境界面で変化してきた「主体性」によって種として存続することを可能にしてきた（木村 1994，中村 2004）。その視点からとらえる「人の主体性」は社会的存在を前提にしており、「互恵的な利他性や協同性が機能する人同士の共同体をつくることで心の充足や喜びを得る存在、自己の主体性の完成をめざす存在である」と定義することができる（寺田 2016）。具体的には、人は自己と他者の関係性における弁証法的相互作用によって社会と自己を形成し、現代に至るまで発展してきた。

本研究のキーワードである「自己肯定感」は、人間が心理的身体的健康を保ちながら社会に適応し生きていくため（安治 2014）に、つまり人としての主体性を身につけるために重要な役割を果たしている。しかし、内閣府の『令和元年版　子供・若者白書』によると、日本の子どもは、自己肯定感が低いという結果が指摘されている。自己肯定感の低い子どもは、成長していく過程で、さまざまな困難に遭遇するリスクが高く、社会適応がうまくいかないとも言われる（榊原 2014）。子どもの幸福感や心の充実感を育てる環境づくりは、親をはじめとする社会全体の役割でもある。

自己肯定感は、自分にとって大切な場面や分野における「できる能力」と、他者からの「承認」という 2 つの作用が重要な育成要因になる（榊原 2014）。後者の他者については、乳幼児期における親と子の関係性を基盤として、保育者、友人、血縁者、近隣者などの人的環境を指す。本研究では研究の枠組として家族システム理論を援用した。つまり、家族システム理論における自己肯定感において、子どもの自己肯定感は親との関係性で育てられ、親の自己肯定感は地域や家族や職場、保育者など他者との関係性によって育てられる、という社会システムの視点から、個人と家族の相互作用的関係性としてとらえた（図 1）。この家族システム理論を援用した仮説に立てば、親の自己肯定感が高いと親との関係性から子どもの自己肯

定感も高くなるということになる。多くの先行研究（加藤・中島 2011，安治 2014，田所・大塚 2015　他）から親自身の自己肯定感のありようや肯定的養育感情・態度が、子どもの自己肯定感に大きく影響をおよぼすことが明らかになっている。

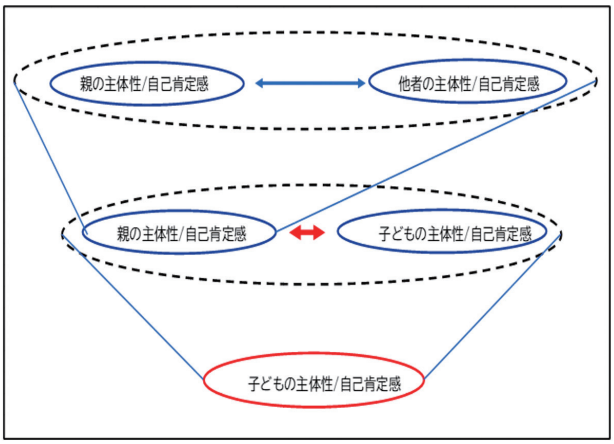


図 1．家族システム理論に基づいた親と子の主体性と自己肯定感における関係性

本研究では、幼保連携型 A 認定こども園（以下、A 認定こども園）の保護者を対象としたアンケート調査によって、親の自己肯定感や養育感情・態度の現状について明らかにし、子どもの自己肯定感の育ちに向けた親の自己肯定感育成の課題を検討することが目的である。

2）本研究における自己肯定感の定義

自尊感情とは「自分を尊い存在であるとする感情」であり、この捉え方についてはほぼ共有されているといえる（加藤・中島 2011）。一方、自己肯定感や自尊感情の定義や相違について、多領域の先行研究から整理した田島・奥住（2013）は、「自尊感情には少なからず『評価』『価値』の視点がある」ことを指摘しつつ、自己肯定感の定義として「ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面もふくめて、自分が自分であっても大丈夫という感覚、感情である」と位置づけており、本研究においてもこの定義を援用したい。

2．研究の方法

1）調査の対象と方法

A 認定こども園保護者に対して無記名自記式アンケート調査を実施した。クラス毎に連絡帳にアンケート用紙をはさみ、迎えの折に保育教諭から保護者に手渡した。回収については、自宅で記入後、送迎の折に事務室前の箱に入れてもらった。

2）調査の内容

「自己肯定感尺度」（Mimura & Griffiths 2007 日本版 RSES）と、「親の子育て感情・態度 15 問」（「育児不安尺度」（牧野カツコ 1983）、「親役割診断尺度」（谷井淳一・上地安昭　2001）を中心に構成）を用いて、親の自己肯定感や子育ての感情や現状を、「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 件法で質問した。親に影響を与える保育者の言動を自由記述で問うた。

3）調査期間と回収率

①アンケート配布数 176 家庭（0 歳～ 5 歳園児 204 名中きょうだいは年上に配布）

②アンケート配布・記入・提出期間　2021 年 8 月 2 日～ 8 月 25 日

③有効回収数　114 票　有効回収率　64.8％

4）分析の方法

分析方法としては、統計分析を中心とした。「親としての自己評価値」の点数の理由を「親の子育て感情・態度 15 問」で問い、その数値データの主成分分析から A 認定こども園の子育て家庭層の状況を明らかにした。「親としての自己評価値」を従属変数、「親の子育て感情・態度 15 問」数値データを独立変数としてカテゴリカル回帰分析を行い、自己評価値に影響を与えた因子を明らかにした。また「親の自己肯定感尺度」による数値データからA認定子ども園保護者の自己肯定感の現状を明らかにし、「親自身の自己評価値」との関係を Spearman 相関分析によって明らかにすることによって親の自己肯定感に影響を与えている因子を明らかにした。さらに、A 認定こども園の保護者の自由記述から自己肯定感に影響を与える保育者の言動を、質的分析法（佐藤 2008）によって明らかにした。

統計分析ソフトは、SPSS　Statistics28 を用いた。

5）調査の倫理的配慮

本調査を実施するにあたっては、大阪芸術大学「人を対象とする研究倫理審査会」（2021 年 7 月）において承認を得た。

3. 研究の結果

1）アンケート調査回答者の属性

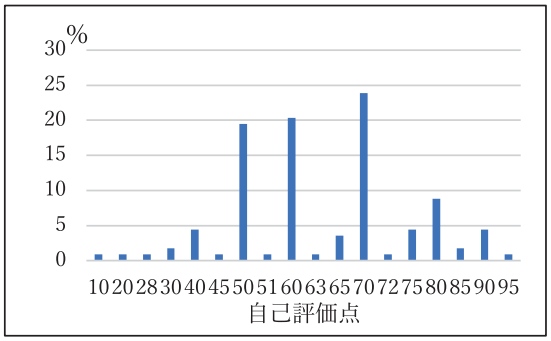
調査回答者の主な属性は、母（94.7％）父（5.3％）、回答者の年齢は 35 ～ 39 歳が最も多く（31.6％）、次いで 30 ～ 34 歳（28.9％）、25 ～ 29 歳（16.7％）、40 ～ 44 歳（14.9％）であった。就労時間の平均値は 6.88 h、中央値 7 h、最頻値は 8 h であり、就労形態は常勤（52.6％）、パート・アルバイト（34.2％）、無職（4.4％）、自営業（2.6％）、その他（3.5％）であった。入園認定種類状況は、1 号（11.4％）、2 号（49.1％）、3 号（39.5％）であり、保育所対応が 9 割を占める。同居している家族人数値は、4 人（49.1％）が最も多く、3 人（26.3％）、5 人（14.9％）と続く。子どもの人数は、2 人（52.6％）、1 人（28.9％）、3 人（14.0％）であり、A 認定こども園に在園している子どもの人数は、1 人（70.2％）、2 人（27.2％）であった。家族形態は、子どもと両親（87.5％）、ひとり親と子ども（6.3％）、子と両親と祖父母（いずれか一方を含む）（2.7％）、ひとり親と子と祖父母（いずれか一方を含む）（2.7％）であった。

2）A認定こども園保護者の 4 つの子育て層

(1)　親の「子育ての自己評価値」における状況

「自分の親としての自己評価を 100 点満点でつけるとしたら何点ですか」の設問に対して図 2 の分布結果が得られた。平均値 62.56 点、四分位範囲をみると全体の 25 ～ 75％が 50 ～ 70 点に分布している【IQR（50 - 70)】ことが確認できる。最低値 10 点から最大値 95 点まで広く分布し、全体の 25％が 50 点以下の自己評価をつけており、自己における親としての否定的

感情を少なからずもっている層が１／４を占めることが確認できる。



平均値		62.56
中央値		60
標準偏差		15.161
最小値		10
最大値		95
パーセンタイル	25	50
	50	60
	75	70

図２. 親としての自己評価値と統計的概要

(2)　A認定こども園における子育ての４つの家庭層

表１. 子育て感情・態度１５問

①	子育てが楽しいと感じる
②	子どものことでどうしたらいいのかわからなくなるときがある
③	私が親でよかったのかな、と思うことがある
④	子育てによって、自分が成長していると感じられる
⑤	子どもを育てるために我慢ばかりしている
⑥	子どもが楽しそうにしている
⑦	子どもと喧嘩をしたり、しかることが多い
⑧	子どもが「好き」と言ってくれる
⑨	子育てで、子どもにすまないと思う面がある
⑩	子育ての知識や技術をほとんどもっていない
⑪	自分が理想とする親イメージと自分自身に距離を感じる
⑫	子どもがわずらわしくてイライラすることがある
⑬	子どもが順調に成長・発達している
⑭	周囲のサポートがあり子育てが苦にならない
⑮	一人で子育てをしている感じがして落ち込むことがある

この「自分の自己評価点の理由は何ですか」の設問に対して、表１の「子育て感情・態度の 15 問」(「育児不安尺度」(牧野 1983)、「親役割診断尺度」(谷井･上地 2001) を中心に構成) に「あてはまる」から「あてはまらない」まで４件法で質問し、それぞれ４＝４点、３＝３点、２＝２点、１＝１点と数値化した。否定的内容である②③⑤⑦⑨⑩⑪⑫⑮（紗部分）については点数を反転（4→1点、3→2点、2→3点、1→4点）した。なお、この子育て感情・態度 15 問データに Cronbach の信頼係数を求めたところ、係数は .802 であり、内的整合性が認められている。A 認定こども園保護者の子育てにおける家庭層を知るために、この子育て感情・態度 15 問結果データを主成分分析にかけたところ、表２の結果が得られた。なお、この主成分分析の Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.755、Bartlett の球面性検定の有意確率は <. 001 であるので、主成分分析としての妥当性は認められている。

表2. 子育て感情・態度15問結果データにおける主成分分析

子育て感情・態度 15 項目	1 主成分	2 主成分	3 主成分	4 主成分
子育てが楽しい	0.719	0.223	0.179	-0.031
（変換）子どもがわずらわしくてイライラするときがある	0.704	-0.022	0.146	-0.197
（変換）一人で子育てをしている孤立感があり落ち込む時がある	0.632	0.182	-0.492	-0.156
（変換）自分の理想とする親イメージと自分自身に距離を感じる	0.608	-0.435	0.133	-0.034
（変換）子どもを育てることに我慢ばかりしている	0.603	0.198	-0.345	-0.011
周囲のサポートがあり、子育てが苦にならない	0.581	0.461	-0.325	-0.241
子どもが楽しそうにしている	0.533	0.301	0.359	0.028
（変換）子どもと喧嘩をしたりしかることが多い	0.53	-0.314	0.157	-0.205
（変換）私が親でよかったのかなとおもうことがある	0.498	-0.419	0.052	-0.096
自己成長を感じる	0.46	0.34	0.223	-0.151
（変換）どうしたらいいのかわからない時がある	0.452	-0.302	-0.245	0.202
（変換）子どもにすまないと思う面がある	0.509	-0.622	0.012	0.048
子が好きと言ってくれる	0.024	0.215	0.739	-0.192
（変換）子育て知識・　(2)技術をもっていない	0.41	-0.074	0.183	0.679
子が順調に発達している	0.391	0.394	0.012	0.634
寄与率	28.632%	11.265%	9.217%	7.602%

表２の主成分分析結果（太線）から､「子育て充実層」「内面的葛藤層」「子育て負担感層」「子育て孤立感層」の子育てにおける４つの家庭層に分類できると考察される。

①　第１主成分＝子育て充実層

「子育てが楽しい」に代表され、日々の生活や子育て全般において充実している家庭層である。周囲のサポートもあり、子どもとの関係性も良好である。親としての自己肯定感、自己評価も高い。

②　第２主成分＝内面的葛藤層

「子どもにすまないと思う面がある」に代表されるが、周囲のサポートもあり、「子育てが楽しい」という側面はもっている。「私が親でよかったのかと思う面がある」「自分の理想とする親イメージと自分自身に距離を感じる」の項目に否定的な要素を多分に持っている。自己に対する期待値が高く親自身の内面的な心の葛藤がある。子どもとの関係性の不安定さが上記の感情の要因なのかもしれない。親としての自己肯定感の低さがみられる層である。

③　第３主成分＝子育て負担感層

「子どもが好きといってくれる」に代表されるように親子の関係性は充実しているが、周囲のサポートがあまりなく、子育ての孤立感が大きい。「子どもを育てるために我慢ばかりして

いる」という負担感が大きく、内的な充足感があまり充たされていない層である。

④　第４主成分＝子育て孤立感層

「子育ての技術・知識」「子どもの順調な成長・発達」に代表されるように子育てに真面目に誠実に取り組んでいるが、「子育てが楽しい」という感情は負である。子どもとの関係性に不安がみられ、親自身の内的な充実感も薄い。周囲のサポートもあまりなく、子育てに孤立感を感じている家庭層である。

表２の結果から、「子育て充実層」が最も大きな割合を占めるが、内面葛藤や負担感、孤立感を感じる子育て家庭層も存在している。親の子育てにおける充実感や肯定感を高めるために、どのような課題が必要であろうか。

３）「親としての自己評価値」に影響を与える「子どもが楽しそうにしている」

「親としての自己評価値」の点数の理由は何ですか、の問に対する「子育て感情･態度 15 問」の数値データを独立変数とし、自己評価値を従属変数としてカテゴリカル回帰分析をしたところ、表３の結果が求められた。

表３. 自己評価値と子育て感情・態度１５問のカテゴリカル回帰分析

	標準化係数		自由度	F	有意確率
子育て感情・態度	ベータ	標準誤差のブートストラップ（1000）推定値			
①楽しい	-0.233	0.222	2	1.109	0.335
②行き詰まり反転	-0.101	0.149	1	0.459	0.5
③良いのか反転	0.064	0.157	1	0.163	0.687
④自己成長感	-0.03	0.163	1	0.033	0.857
⑤我慢反転	0.009	0.177	1	0.002	0.961
⑥子どもが楽しそう	0.308	0.108	2	8.192	<.001***
⑦衝突反転	0.045	0.168	2	0.073	0.929
⑧子が好きと言う	0.055	0.142	1	0.147	0.703
⑨申し訳なさ反転	0.285	0.137	1	4.342	0.04*
⑩知識技術反転	0.163	0.13	4	1.558	0.193
⑪乖離感反転	0.274	0.154	2	3.175	0.047*
⑫イライラ感反転	-0.135	0.22	1	0.378	0.541
⑬子が順調に発達	-0.076	0.138	1	0.308	0.58
⑭サポート	-0.051	0.164	2	0.098	0.907
⑮孤独感反転	0.177	0.14	3	1.597	0.196

*** $p < 0.001$　**　$p < 0.01$　* $p < 0.05$

この回帰分析については重相関係数（多重 R）0.702、R^2 0.493、調整済み R^2 0.341、F 値 3.261（$p = 0.000$）であり、回帰分析としての妥当性は認められる。

結果から明らかになったことは、親としての自己評価値に最も関連が強いのは「子どもが楽しそうにしている」（$p <. 001^{***}$）であった。子どもの「楽しそうにしている」幸福そうな姿が、親としての肯定的評価に最も有意に関連することから、親が親であることの自覚や意

識が、子どもの幸福な表情、感情が前提であり、子ども自身が心から「楽しい」と思える状況における親の肯定的充足度や、子どもの気持ちや思いを重視する親の感覚は、親と子の関係性において好ましいものだと考察する。

その他にも「子育てで、子どもにすまないと思う面がある」(p=0.04*)、「自分が理想とする親イメージと自分自身に距離を感じる」(p=0.047*) に有意な関連性がみられ、親自身の心の中における葛藤が、子育て感情の否定的部分を占め、それが自己評価値のマイナス感情になっていると考えられる。これは親の真面目さや一生懸命さ、誠実さ、責任感の強さなどの意識や姿勢の裏返しでもあり、捉え方・考え方一つで、マイナスにもプラスにも評価できる。周囲の温かいまなざしやサポートによって肯定的な感情に変化する可能性は大きい。

4）親の自己肯定感の状況

「自己肯定感尺度」(Mimura & Griffiths 2007 日本版 RSES) による 10 項目を設定 (表 4) し、「あてはまる」から「あてはまらない」まで 4 件法で質問した。それぞれ 4 = 4 点、3 = 3 点、2 = 2 点、1 = 1 点化した。否定的内容である②、⑤、⑥、⑧、⑨（紗部分）については点数を反転（4 → 1 点、3 → 2 点、2 → 3 点、1 → 4 点）し、①～⑩までの合計値を度数分布にしたものが、親の自己肯定感尺度合計値分布（図 3）である。

表 4.【自己肯定感尺度】(Mimura & Griffiths 2007 日本版 RSES)

①私は、自分自身にだいたい満足している
②時々、自分はまったくダメだと思うことがある
③私にはけっこう長所があると感じている
④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる
⑤私には誇れるものが大してないと感じている
⑥時々、自分は役に立たないと強く感じることがある
⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている
⑧自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う
⑨よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう
⑩私は、自分のことを前向きに考えている

なお、この自己肯定感尺度データに Cronbach の信頼係数を求めたところ、係数は .853 であり、内的整合性が認められている。また、図 3 において自己肯定感尺度合計値の分布状況を示し、最大値 40、最小値 16、平均値 26.96 であった。

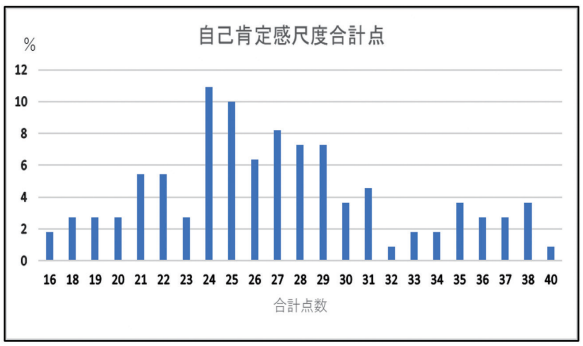


図 3. 親の自己肯定感合計値分布状況

この自己肯定感尺度に関しては、日本の健常者の平均は概ね 25 点前後であると言われているので、A 認定こども園保護者の自己肯定感は高い傾向にあるといえ

るが、四分位範囲を確認するとIQR（24-30）であり、中央値26に対してバラツキがやや大きいことが確認できる。

この自己肯定感尺度合計値と基本属性の関連性について、クロス集計をしてχ２検定を行ったところ､｢家族構成｣に有意な関係性が認められ【CramerのV = 0.512（p = 0.036 < 0.05)】、ひとり親家庭の親の自己肯定感が低い傾向がみられた。ただし、108名回答数の内の「ひとり親家庭」が7名と少人数のため、統計的信頼性は低いと考えられる。他の基本属性（性別、年齢、労働時間、労働形態、認定種類、家族人数、子ども人数）においては、統計的な関連性が認められなかった。

5）「子どもが楽しそうにしている」「親の自己評価値」「親の子育て感情・態度」と「親の自己肯定感」の相関関係

3）で求めた「子どもが楽しそうにしている」と「親の自己評価値」「親の子育て感情・態度15問合計値」と、4）で求めた「親の自己肯定感尺度合計値」をSpearmanの相関分析にかけたところ、表5の結果が求められた。

表5.「子どもが楽しそうにしている」「親の自己評価値」「親の子育て感情・態度15問合計値」と「親の自己肯定感尺度合計値」におけるSpearmanの相関分析

		親としての自己評価値	子が楽しそうにしている	子育て感情・態度15項目合計値	自己肯定感尺度合計値
親としての自己評価値	相関係数	1	.300**	.494***	.621***
	有意確率（両側）	.	0.001	<.001	<.001
	度数	113	113	112	110
子が楽しそうにしている	相関係数	.300**	1	.509***	.239*
	有意確率（両側）	0.001	.	<.001	0.012
	度数	113	113	112	110
子育て感情・態度15問合計値	相関係数	.494***	.509***	1	.477***
	有意確率（両側）	<.001	<.001	.	<.001
	度数	112	112	112	109
自己肯定感尺度合計値	相関係数	.621***	.239*	.477***	1
	有意確率（両側）	<.001	0.012	<.001	.
	度数	110	110	109	110

*** p＜0.001　**　p＜0.01　* p＜0.05

「子が楽しそう」×「自己評価値」(0.300, p=0.001)、「自己肯定感尺度合計値」×「自己評価値」(0.621, p < 0.001)、「自己肯定感尺合計値」×「子が楽しそう」(0.239, p=0.012)「自己

肯定感尺度合計値」×「子育て感情・態度15項目合計値」(0.477, p<. 001)、「子が楽しそう」×「子育て感情・態度15問合計値」(0.509, p<. 001)、「自己評価値」×「子育て感情・態度15問合計値」(0.494, p<. 001) の結果が得られ、「子どもが楽しそうにしている」「親の自己評価値」「親の子育て感情・行動15問合計値」「親の自己肯定感尺度合計値」は、それぞれに相関関係が認められた。

つまり、「子どもが楽しそうにしている」ことが親としての自信や意欲につながり、親の子育て感情・態度にも影響を与え、親自身の自己肯定感向上にもつながることが認められた。これらのことから、「子どもが楽しそうにしている」ことが、親と子の関係性における循環的相互作用に影響を与える重要なキーワードになることが明らかになった。

6）親の自己肯定感に影響を与える保育者の言動

(1) 親の自己肯定感を高める保育者の言動

「先生から親として元気をもらい前向きになる言動はどのような内容ですか」を自由記述で回答してもらった。自由記述全体の文章を、縦軸：「保育者の言動」、横軸：「対象内容」に分けて数値化したところ、表6のような結果を得られた。

表6. 親の自己肯定感を高める保育者の言動

内容 / 保育者	子どもに関すること						親に関すること		その他	合計	%
	友達との関係性	成長	作品・能力	園での日常・遊び	性格・人間性	家族の話	子育て	人間性・状況	保育者の姿勢・対応		
伝える	13	10	2	20	1	2				48	48.5
ほめる		2	5	3	2		5			17	17.2
共感							1	2		3	3.0
連絡帳詳細記入				1						1	1.0
一緒に喜ぶ	2	2		2			1			7	7.1
アドバイス		1		1			6			8	8.1
励ます							6			6	6.1
挨拶									2	2	2.0
優しく接する									3	3	3.0
笑顔が多い									1	1	1.0
肯定的に捉える									2	2	2.0
話を聞いてくれる									1	1	1.0
合計	15	15	7	27	3	2	19	2	9	99	100.0
%	15.2	15.2	7.1	27.3	3.0	2.0	19.2	2.0	9.1	100.0	
合計	69.8						21.2		9.1		

「子どもに関すること」が全体の約７割を占め、前述した親の自己肯定感と「子どもが楽しそうにしている」の有意な関連性に整合性が認められた。その中でも特に「園での日常･遊び」「友達との関係性」「成長」に関する子どもの「できる能力」を、保育者が「認める」言動が親を前向きに元気にしていることが示された。愛するわが子が幸福そうに、楽しそうに、生き生きと日々を送っていることは、親にとって最高の幸福であり親としての肯定感にもつながるのであろう。また、子育てや親自身の生き方を肯定的に励ましたりする言動も親を前向きに元気にさせていたことも示された。つまり、親の子育てや仕事に頑張っている「できる能力」を、専門職である保育者が「承認する」ことによって親の自己肯定感が向上することが示された。

(2) 親の肯定感を低くする保育者の言動

「先生から親として落ち込んだり否定的な気持ちになる言動はどのような内容ですか」について自由記述で回答してもらった。自由記述全体の文章を、縦軸：「保育者の言動」、横軸：「対象内容」に分けて数値化したところ、表７のような結果を得られた。

表７. 親の自己肯定感を低くする保育者の言動

内容／保育者	子どもに関すること						親に関すること		その他	合計	%
	友達との関係性	成長	作品・能力	園での日常・遊び	性格・人間性	家族の話	子育て	人間性・状況	保育者の姿勢・対応		
伝える	4	1		5	1	1				12	52.2
注意・アドバイス							4	2		6	26.1
まじめすぎる									1	1	4.3
理解してくれない									1	1	4.3
ヒステリックにしかる									1	1	4.3
親と子のセットで覚えてくれない									1	1	4.3
何も言わない、何も聞かない									1	1	4.3
合計	4	1	0	5	1	1	4	2	5	23	100.0
%	17.4	4.3	0	21.7	4.3	4.3	17.4	8.7	21.7	100.0	
合計	52.0						26.1		21.7		

合計文章が23であり、肯定的合計文章の99に比較し、約１／５である。その中で対象内容の半分を占めるのが「子どもに関すること」である。その内容から、保育者はいいことも悪いことも事実として保護者に報告するが、子どもの悪い報告に対する保護者の感情が読み取れる。保育者としては、事故や怪我の防止、家庭でも見守って欲しいことなど、子どもの成長や発達に関わることを保育者の責任として報告しているが、受け止める側の親の気持ち

を理解し、伝え方の工夫を重ねて考える必要がある。

4. 親の自己肯定感育成のための課題

1）「子どもが楽しそうにしている」を中心とした循環図の提案

本研究から「子どもが楽しそうにしている」場面をつくることで親の自己肯定感が向上し、子育ての充実感や自信、意欲が得られ、親の肯定的な感情や行動が増えることが示された。

では、どのようにして「子どもが楽しそうにしている」場面をつくったら良いだろうか。

子どもたちが一日の大半を過ごす保育所や幼稚園、こども園の保育環境や保育内容によって「子どもが楽しそうにしている」場面をつくり出し、図4に示した循環図を一つの課題として設定することが考えられる。

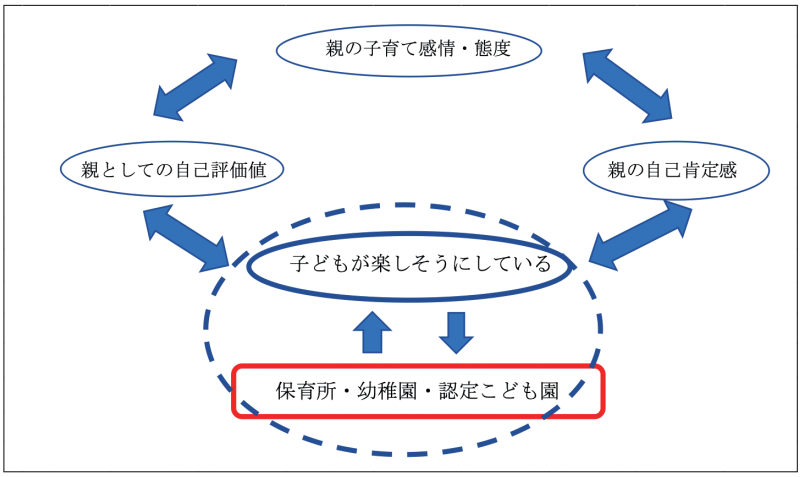


図4.「子どもが楽しそうにしている」を中心とした循環図

2）A認定こども園の自己肯定感を大切にした保育環境と保育内容

A認定こども園保護者に、子どもの自己肯定感の行動面での特徴について、「お子さんは、日常生活や遊びの中で、元気で前向き、意欲や自信をもって取り組みますか」に対して「ほとんどの場面において」「場面によって」「場面が少ない」「場面をまったくみない」の4件法で問うたところ、「ほとんどの場面において感じる」(46.8%)「場面によって感じる」(53.2%)が示され、否定的に評価している保護者は0%であった。

写真1. 2歳児の保育室

A認定こども園は、子どもの自己肯定

感育成を大切にした保育環境や保育実践をこころがけている。たとえば､低年齢児クラスでは、育児担当制を組み愛着関係を深めることを意識し自己肯定感の基盤をつくる。0歳児から5歳児まで各保育室にコーナーを設置[(1)]しており、家庭環境に近づけるだけでなく、子どもが遊びを主体的に選択することを大切にしている。コーナーが持つ「好きで選ぶが故に生まれる意欲」を基盤としてその意欲に導かれて子どもたちは夢中になって遊ぶ（写真1)。苦労や失敗を恐れない勇気を獲得すること、そして自分で決めたことを達成したときの感動体験が自己の原体験となり、自己への自信、他者への信頼へとつながる。

写真2. 一人ひとりのシンボルマーク

写真3. 私の遊びは私が決める

園児全員に一人ひとりにその子どものシンボルマークを決めて椅子などの備品や持ち物にそのシールを貼っている（写真2)。現在200名余りの園児がいるので、200種類余りのシンボルマークがある。シンボルマークは、入園から卒園まで同じものを使うことで自分の存在や居場所を示す役割があるだけでなく、保育者の一人ひとりを大切にしたい、園児たちの大切にされたいという思いの相互作用が、子どもの自己肯定感を育て、さらに友達のシンボルマークにふれることによって、自分と同じように友達も大切にしようという意識を育てている。

写真3は、日常保育の中では、遊ぶコーナーを自分で決めてボードに自分のシンボルシールを貼っている一場面である。友達の選んだコーナーも見ながら、自分の遊びを自分で選ぶ。周囲の関係性を意識しながら、自己の意欲や関心に基づいた「遊び」を選択できるこのボードに、子どもの主体性や自己肯定感を大切にしたいという園の教育・保育方針がある。

図4で提案した循環図に照らして検証すると、A認定こども園では「主体性」「子どもの自己肯定感」育成を意識した保育実践を行っており、そのため、子どもの意欲や自信、前向きな肯定的気持ちが強い傾向にあり「子どもが楽しそうにしている」と親は感じると考える。本研究からA認定こども園保護者の自己肯定感が比較的高いことが明らかであり、子育て家

庭層の統計分析においても、「子育て充実層」が最も大きな割合を占めていることが示されている。

しかしながら、内面的葛藤や負担感、孤立感を感じる子育て家庭層も存在し、また自己肯定感が低い家庭層も顕在化している。否定的感情を抱いた親の自己肯定感育成について本研究の自由記述分析から考察したい。

３）親と子の「できる能力」を見つけ「承認」することの重要性

表７における親の自己肯定感を低くする保育者の言動の自由記述分析から、子どもの状況や場面が危険であったり、懸念する事実、成長・発達に関わることを、保育者は保護者に報告しているが、親としては、おそらく「親の育て方」「家庭のしつけ」「子どもの言動」を批判されたととらえ、自分自身の子育てや子どもの育ちに不安を覚えたり、子どもに申し訳なさを感じたりするのだろう。表６における分析から、親や子の「できる能力」を専門職である保育者が「認める」ことによって親が前向きに元気になることが示されている。人は誰でも「社会的承認」を得たいという基本的要求をもっている。子どものいいところや親の頑張りを見つけ、その「できる能力」を励まし勇気づけることが必要である。

自己肯定感は感情や感覚の部類であり、理屈から生まれてくる意識ではない。自己肯定感が低かったとしても、それはある面においては客観的に自己を分析しているということでもある。自身の力でマイナスをプラスに変換する意欲や建設的志向があれば、決して否定的感情のみに終わらないが、その変換する力までたどり着くことが難しく、他者からの支援が必要である。榊原（2014）は、「自己肯定感には、自分にとって大切な場面や分野における『できる能力』と、他者からの『承認』という２つの作用が重要な育成要因である」と指摘する。親にとってみれば、友達と「子どもが楽しそうにしている」、日々の保育活動を「子どもが楽しそうにしている」など、「子どもが楽しそうにしている」ことが、親の自己肯定感向上につながることを本研究は明らかにした。愛しい大切な対象であるわが子が幸福そうに楽しそうに生き生きしていること自体に、子どもをここまで育てた、子育て環境をつくってきた、または選んできた、親自身の役割や責任を果たしたという「肯定感」を示すものであると考える。親に子どもの安全や育ちを支援する上で悪い事実を伝えないといけない時もあるが、そんなマイナスをプラスに変換し、カバーすることのできる親と子の「できる能力」を見つけ「承認」することが、専門職である保育者の役割として重要だと考える。

そして、何よりも子どもの主体性や自己肯定感を育てる保育環境や保育内容を工夫することが、「子どもが楽しそうにしている」状況を作り出し、親の自己肯定感育成につながることが重要であることを本研究から示唆されたと考える。

注

(1) コーナー保育は、1930 年代にパーカスト女史が子どもたちの「自ら学ぶ力」を大切に受け止め、当時の米国の教育現状の反省から生み出した教育・保育環境の一つである。

引用文献

安治陽子（2014）「子どもの自己肯定感」『幼児の教育』113（1）63-65

加藤悠・中島美那子（2011）「母親の自尊感情と養育態度―子どもの自尊感情を育むために」『茨城キリスト教大学紀要』45,119-129

木村敏（1994）『心の病理を考える』岩波書店

榊原洋一（2014）「自己肯定感の発達」『幼児の教育』113（1）61

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社

田島賢侍・奥住秀之（2013）「子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討；肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて」『東京学芸大学紀要』64（2）19-30

田所摂寿･大塚周（2015）「母親の自尊感情からみた親子関係の質に関する研究」『作新学院大学論集』5,295-309

谷井淳一・上地安昭（2001）「親役割診断尺度」『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社　155-158

寺田恭子（2016）「親と子の主体性育成を目的とする子育て支援に関する研究」 関西福祉科学大学大学院社会福祉学科臨床福祉学専攻博士論文

中村桂子（2004）『ゲノムが語る生命』集英社新書

牧野カツコ（1983）「乳幼児をもつ母親の生活と育児不安」『家庭教育研究所紀要』 34-56

謝辞

本研究につきましては、ご多忙な中、A認定こども園の保護者、教職員の皆様には調査にご協力いただき、大変お世話になりました。有り難うございました。

付記

本研究は 2021 年度塚本学院教育研究補助費の助成を受けて実施しています。